

折々の記 No188 : 本領発揮!

(H24/3/7 記)

阪神淡路大震災時(小生は中部方面総監部の防衛部長)には第 13 師団の 3 部長として阪神地区における師団長の指揮を的確に補佐し、小生富士学校勤務時代には企画室長として縦横無尽の活躍をした越野修三君(防大 17 期生)を第二の主役とする“河原れん”氏のノンフィクション小説「ナインデイズ(岩手県災害対策本部の闘い)」(幻冬舎刊)を一気に読了した。

(向かって右のイラスト画が越野君)

本ドキュメンタリーは、岩手県災害対策本部医療班長秋富慎司医師(岩手医科大付属病院勤務)の目を通して発災から県災害対策本部の立上と初動対処の状況を描いたものである。

発災直後の茫然自失と混乱、そして情報の欠如、そういう中で、秋富医師の医療体制の構築と被災者救助に掛ける苦闘を余すところなく描写したものである。



未曾有の大規模災害発生時の県レベルの対策本部の実態をリアルに描写しているので、参考になる。被災者や市町村の悲痛な叫びに対して余りにも無力な県の実態、その中で今までの経験からあるべき体制を構築しようにも理解を得られないもどかしさ、政府や各省庁の余りにも縦割り行政、現地の状況を理解しない紋切り型の対応等々が赤裸々に語られている。

小生としては旧知であり奇しき縁のある越野君の活動振りが語られている部分に関心があり、それを重点的に読んだのであるが、流石は越野なり、彼の本領発揮だなと感じ入った次第である。

その部分を下記に特に引用する。

DAY 1

「自衛隊出身の猛者、越野防災危機管理監が駆けつけてきたのは、発災から 5 時間が過ぎようとしていた時だった。越野はアクの強いほかの幹部と比べても引けを足らないほど、個性的な御仁だ。(中略) 県職員はもちろんのこと、自衛隊をも動かせる強力なリーダーシップを持つ越野は、対策本部にとってなくてはならない存在だ。(中略) この人がいなければ、対策本部は動かないと言っても過言ではない。しかしだからと言って要となる人物がいつもいてくれるとはかぎらない。いや、災害には不測の事態がつきものである。発災時刻に、越野はまさかの出張中だった。(中略) その越野がようやく姿を現すと対策本部に静かな安堵が広がった。」(51 p ~ 52 p)

DAY 2

「日の出の少し前、達増知事が再び本部に姿を現した。救助方針の最終確認を行うためだった。知事の説明に立ったのは指揮官役の越野だ。すでに決めた救助の優先順位を報告する。知事は、意見を挟まずに説明にじっと耳を傾けていた。(中略) 「全ての人を助け出すのは不可能です。人命救助を最優先に、差し迫った命の危険がある人から順に救出を行い

ます。」(中略)知事は深く頷いた。(中略)夜明けまで、三十分を切っていた。「本格的な救助活動は夜明けと同時開始する。それぞれが連携し、空と陸からいっせいに救助を行う。

(以下略)」越野が最後の発破をかけた。「最善はない。迷っている暇もない。空振りを覚悟で決断しすぐに動け！」(72p～73p)

DAY 5

『「物資の供給体制を早急に立ち上げなければ間に合いません。」定時会議で菊地課長が提言した。(中略)被災者から直接話を聞き、ニーズを纏めてきてくれたのは自衛隊だった。これも本来ならば市町村の役目で、自衛隊の任務ではない。(中略)それに対して物資の管理を行う県職員は数十名程度だ。それでどうやって、集積から仕分け、分配、搬送までを管理するのか。(中略)少ない物資を配分するためには、避難者の年齢や性別、世帯構成も調査すべきだというのだ。「ですが・・・」不服そうに言ったのは、別の県職員だ。「それは市町村の仕事ではないでしょうか」(中略)「・・・それでも県の仕事ではありません。」(中略)「・・・それに私は避難所を把握する役目であって、被災者を助ける役じゃありません。」この一言に、遂に越野が激昂した。「バカ野郎！いつまでグダグダ抜かしてるんだ！今は非常時なんだ。人を救うことだけを考えろ！」般若のような顔で猛然といきり立つ。自衛隊にいた越野からすれば、この県職員のぬるさは到底受け入れられないものだった。「現地には家族を亡くしても働いている職員がいるんだ。役場もろとも流されたところもある。それなのに、県だの市だのと言っている場合か。現場の状況を考えて動け！」職員が、ぼかんとした顔を向ける。(中略)啖呵を浴びてさすがに尻込みしたものの、黙り込んだ職員の顔にはまだ不服の色が見え隠れしていた。』(173p～176p)

DAY 6

『「自衛隊のトラックを遺体搬送に使わせてほしいのですが・・・」この日、越野のもとに現場から要望が入った。沿岸市町村が、安置所から火葬場までを自衛隊の大型トラックで運んでほしいと依頼してきたのだ。(中略)しかし、越野はこれに真っ向から反対した。阪神淡路大震災で身内の遺体をトラックで運ばれた遺族が、後々まで「モノのように扱われた」と悔しそうに言っていたのを忘れずにいたからだ。「御遺体にも尊厳がある。たとえ有事であっても、やってはならぬこともある。物を運ぶトラックを使えば。遺族を更に悲しませることになりかねない。」被災者を救うためには越えなくてはならないルールはあるが、人として絶対に守らなければならない線もある。』(188p～189p)

DAY 7

『避難者数は日々流動的に変化する。それを毎日吸い上げ、確実に供給しなければならない。できない、とは絶対に言えないが、その苦労は尋常ではない。(中略)「避難所にいない人も、配給の時間になると取りに来ているようです。その数がどれ位になるかまでは把握しきれません。」(中略)越野が疑問をぶつける。「在宅避難者だって、食べるもんがないから来てるんじゃないのか」「けれど、災害救助法では、食糧支援は避難所にいる人のみと決まっています。自宅にいる被災者に支援することは法律の範囲外です。」またか・・・越野

はうんざりしたように、ため息をついた。「なにができるか」ではなく、「なにが必要か」で動くべき時なのにそれがまかり通らない。「法律は被災者を守るためにあるんじゃないのか？そんなもんは拡大解釈すればいい。個人の家も避難所に指定してやればいいじゃないか」間に合わせの法解釈に職員の表情が固まる。「しかし、予算の問題もあります。(中略)」
「予算はこっちで何とかします」声を上げたのは総務部長だった。「お金の問題で支援が止まるならうちが調整します。対策本部は、被災者のことを考えて支援を決めて下さい。』」
(205p～206p)

秋富医師の意欲的・献身的な取り組みに敬意を表したい。危機管理監として岩手県災害対策本部を統括した越野君の活躍の一端に触れ、流石我が後輩、越野修三の面目躍如との感を強くした次第である。対策本部の実態を知る好個の参考資料でもある。皆様のご一読を期待する。彼の様な後輩諸氏が多数育っていることを確信しつつ、筆を擱く。(了)